

伊勢湾台風 ～未曾有の高潮がゼロメートル地帯を襲った～

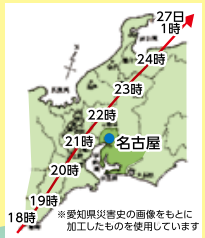
伊勢湾台風は、1959(昭和34)年9月26日の18時過ぎに和歌山県潮岬に上陸し、21時半頃名古屋市に最接近した後、日本海に抜けますが、東北地方に再び上陸し、根室沖で温帯低気圧に変わりました。その間、東海地方を中心に中国・四国地方から北海道までの広い範囲にわたって死者・行方不明者数5,098人と大災害を引き起こしました。また、この災害を契機として防災対策の原点となっている『災害対策基本法』が制定されました。

1959(昭和34年)9月26日 台風15号(風水害・高潮・浪害・暴風雨・高波・洪水)

伊勢湾の満潮時と重なり、海水と強風による被害が拡大し、名古屋市中では死者・行方不明者1,909人、負傷者は40,528人にのぼりました。南区や港区では、1ヶ月もの間、水につかったままの状態が続きました。大高の込高では南柴田新田(現東海市)の堤防が決壊して、海水が1階の天井まで入ってきて、13日間も水が引きませんでした。高見でも床上まで浸水し、大高町では14人もの尊い命が失われました。

<台風の経路>

超大型台風でしかも東海地方の西を通ったので東海地方は暴風雨となり、特に伊勢湾周辺の風は激烈を極めました。



○愛知郡鳴海町の被害

重傷者2人、軽傷者124人
全壊463戸、床上浸水60戸
床下浸水442戸
(S31.9.1現在人口28,751人)

○知多郡大高町の被害

死者14人、軽傷者89人、
全壊103戸、流失16戸、
半壊47戸、床上浸水452戸、
床下浸水570戸
(S31.9.1現在人口10,081人)

○知多郡有松町の被害

死者1人、軽傷者4人、
全壊15戸、半壊20戸
(S31.9.1現在人口4,150人)



大高町南新田の津島社に建てられている伊勢湾台風の解説と浸水の高さを知らせる柱。(柱上部の赤い線が水位)
神社の屋根と比べても水の恐ろしさがわかり、被害の大きさを今に伝えています。



こんなに多くの被害があったんだね。

伊勢湾台風の爪痕 (緑区大高台 鈴木勝美さんの記録より)



台風で被害を受けた家屋の様子。住んでいた方は、間一髪で流れにのみこまれるところだったそうです。



水が軒下まで浸かったため、壁が全部落ちてしまった家の様子。



この地区は海拔0m地帯のため、潮の満ち引きにより長期間水が引いたり浸かったりしてこの状態が繰り返されたそうです。



高潮で堤防が決壊して、強い流れで軒下まで壊れた住宅の様子。



堤防決壊で、一気に水が押し寄せ一階部分が壊れている家屋。



名鉄電車 常滑・河和線千鳥橋鉄橋南側より名和・聚楽園方面を見たもの。堤防決壊により満潮時は一面水浸しになった。右に見えるのは、愛知製鋼知多工場の煙突と建物。

語り継がれる伊勢湾台風の被害



当時、大高町込高にお住まいだった鈴木勝美さんにお話を伺いました！

この日は午後8時頃から風が強くなり、いつもと水の流れが違ふなと感じました。私の住んでいる大高町の込高地区は海拔0m地帯で、昔から祖父に「台風が来たら水に気をつけろ」と言われていたので、家族5人と隣家の3人の2家族で山手の方へ逃げることにしました。途中、妹をおぶっていた母を休ませるため町内集会所の軒下で休憩し、「さあ、向かう」としたところに水が来てしまいました。海岸線が切れて伊勢湾の水が一気に流れ込んだため、水の勢いも河川氾濫とは全く違うものでした。押し寄せる波に逃げ場所がなく、やむを得ず津島社の拝殿の塀の上に乗りましたが、水位は見る見る上がり、腰のあたりまで水につかりながら、踏ん張ってなんとか耐えしのいだという感じでした。暗闇の中、田畑の農具小屋がマッチ箱のように転がりがら流されていく光景を今も思い出します。恐怖や疲労と闘いながら塀の上で朝5時頃まで我慢していたところ、船で駆け付けた叔父に見つけてもらい、なんとか助かることができました。祖父の言い伝えを思い出して避難したことで、家族に被害が出なかったことは幸運でした。

『鳴海東部小学校創立120周年記念誌』より

鳴海小学校から移築した明治時代から使われた南校舎は10度も傾き、ガラスは全て割れてしまいました。新校舎では瓦が300枚、大ガラスが70枚も割れてしまいました。南の渡り廊下も全て壊れ、学校のあちこちが使えない状態になってしまいました。そんな学校の様子を見て、学区の人たちが自分の家をよく、瓦や木材を持ってきて、瓦ふきや応急処置を一生懸命にやってくれたそうです。(一部抜粋)

『滝ノ水公園の歴史』

公園からの眺望が人気の滝の水公園。元は昭和6(1931)年から同26(1951)年まで名古屋薬学専門学校(現名古屋大学薬学部)がありました。そのあと、伊勢湾台風により発生した倒壊家屋の廃材などが積み上げられ整備されて公園になりました。公園にはガス抜きパイプがあり今も災害の歴史を伝えています。



緑区の主

緑区の災害

緑区の中央を流れる扇川は、元は黒末川と呼ばれ船で祭礼の山車を渡していましたが、ある年に、稚ようになったと伝えられている扇川は、緑区の名所

1912(大正元年)9月22日・23日



浅間堂より前之輪方面を望んだ光景
前方の森は八幡宮。右側の建物は馬糧小屋で(干草小屋)電車はまだ開通していませんでした。向田・上汐田方面に家はなく田んぼばかりでしたが、決壊による被害により、辺り一面海の様でした。



扇川決壊現場(六条付近)の様子
遠方の山は下旭出、大形山方面で今の緑高校のところで、様子を見に来ている人もいました。

鳴海町一色(現在の浦)

8月としては史上最高の記録的な雨量となった昭和地区に集中しました。短時間の局地大雨による小河川が氾濫溢水したのを始め、県下平野部全域の40余の

1971(昭和46年)8月30日・



道路上にあふれ田んぼに溢水する扇川の氾濫。(鳴海町宇砂田付近)



水の中に孤立。たしとなった県の浦里四丁目)



雨が降るたびに家の前は水びたし。(緑区鳴海町で)

な風水害

は扇川の歴史

ていました。上流の熊野社祭礼の節、古くは鳴海より児の舞扇を山車より川へ落とし、以後は扇川と呼ぶであると同時に、水害との戦いの場でもありました。

(風水害・高潮・浪害・暴風雨・洪水・高波)



手越川車路橋付近の決壊現場では、住家が流されている様子が分かります。



浅間堂から柳長方面を望んだ光景
前方の森は平部の諏訪神社。その後の丘陵地は、今、緑区役所がある辺りです。

里付近)に大きな被害

46年台風23号。愛知県下では名古屋市中心部と東三河の被害は大きく、扇川、手越川、逢妻男川、紙田川の小河小川が84箇所決壊または護岸決壊しました。

31日 (風水害/暴風雨)



扇川の氾濫で水び
堂一色住宅(現在
給水船も出動した。



子どもを背にボートで脱出する避難
民。(県営一色住宅で)

都会の中の孤島と化していた名古屋緑区鳴海町一色、県営一色鳴海住宅は、1日朝、2日ぶりに水が引き「陸続き」になった。

<写真提供>
名古屋タイムズアーカイブ委員会

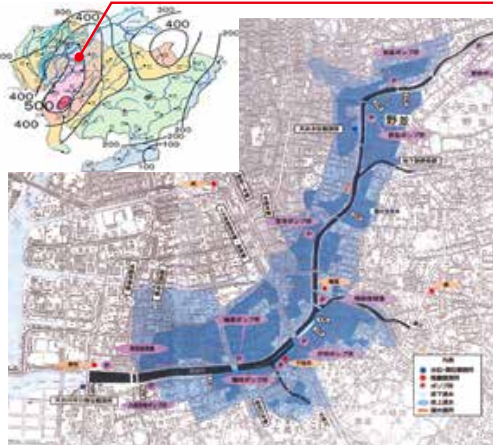


東海豪雨 ～典型的な都市型災害としてこの後の防災対策に大きな影響を及ぼした～

平成12(2000)年9月11日から12日にかけて、日本付近に停滞していた秋雨前線に台風14号からの温かく湿った気流が流れ込んで前線の活動が活発になり、愛知県を中心とする東海地方では記録的な大雨となりました。また、11日夕方から12日3時頃までの大雨のピークとなった時間帯に、知多郡南知多町、美浜町、名古屋市長区などの地域において竜巻が発生しました。市内河川では、西部を流れる新川で左岸堤防が破堤したのを始め、破堤3箇所、越水17箇所の被害が発生しました。これにより、市内の37%が浸水し広範囲で内水・外水被害が発生するなど、伊勢湾台風に次ぐ浸水被害となりました。

2000(平成12年)9月11日・12日 (大雨・洪水・雷・波浪)

愛知県等雨量線図(総雨量) 567mm(名古屋市における2日間累加降水量) 時間最大雨量93mm



【天白川沿いの浸水状況図(愛知県、2000)】

<住宅被害の状況>

(単位:棟)

区 分	住宅被害				
	全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
全 市	4	98	18	9818	21852
緑 区	0	5	8	834	826

<人的被害の状況>

(単位:人)

区 分	死 者	行方不明者	負傷者	
			重 症	軽 傷
全 市	4	0	13	34
緑 区	1	0	5	6

都市化が進むと、農地などに利用されていた丘陵地が市街地として開発されるようになります。その結果、農地であれば貯留されるはずの雨水がそのまま流れるようになるなど、内水や河川への流出量を増大させる要因となり、都市化による新たな対策を求められるようになりました。



名鉄名古屋本線鳴海駅付近の浸水状況
(出典:中部地方整備局)



鳴海町の土砂災害現場
斜面崩壊によりガードレールとの間に挟まれ、男性1名の尊い命が失われた

地名があらわす災害の歴史

地名には、その地に起きた災害の歴史や特徴を、現在に伝えるメッセージが隠されていることがあります。例えば、開発によって分からなくなってしまった土地の高低、埋め立てられてしまった海岸線や池、川などを地名から知ることができる場合があります。

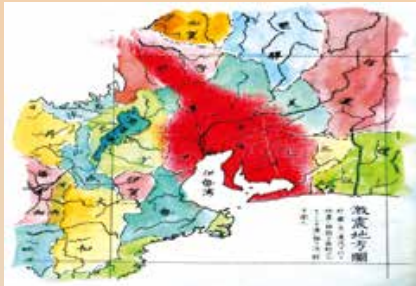
自分の住む土地の名前の意味を知るとは、災害対策をする上で重要なヒントになります。以下に緑区の地名の由来をいくつか紹介します。

- 浦里(うらさと)・・・この辺りは笠寺台地と鳴海丘陵の間に位置し、古くから鳴海潟と呼ばれ景勝の地として和歌に歌われた。潮の打ち寄せる海辺であったことから浦里という名称が町名に使われた。次第に干潟となり新田開発が行われ江戸初期には町の北境の道が東海道として整備された。昭和42年に県営団地が整備されるまでは一面水田であったという。
- 神沢(かみさわ)・・・「信濃国地学略考」に、長野県上水内郡川上村神田沢について、神領田のある沢と説明があり鳴海の字神沢も同じ意味であろうと考えられる。
- 六田(ろくでん)・・・字名「六条」とこの地一帯が良田であったことによる。
- 若田(わかた)・・・古くから田として利用した地である。
- 鳴海(なるみ)・・・鳴海の地は奈良時代の律令制度の下では尾張国愛智郡に所属して成海郷と呼ばれていた。語源としては、かつてこの地が海岸に近かったことから海の音や波の音にまつわるものであったとする説がある。「地名考」によると奈良時代には現在の鳴海町から南区を含み熱田までの海岸を年魚市潟と呼び、平安時代以後に鳴海潟・鳴海の浦と称するようになったとある。
- 上汐田・中汐田・下汐田(かみしおた・なかしおた・しもしおた)・・・江戸時代には総称して汐田と呼んでいたが幕末のころになって上・中・下の水の流れによって3つに分けて呼ぶようになった。汐田の称は海岸近くによくある地名で、汐田とは汐を含む田の意味である。かつては鳴海潟の一部として海であったところが陸となり田となったので、塩気があるとして名づけられた。
- 鶴ヶ沢(つるがさわ)・・・鶴が飛来した所につく地名もあるが、この場合は水路や水路のある低地をさす意味である。
- 込高(こみだか)・・・7世紀に扇川左岸で盛んに行われた新田開発の1つに込高新田があり耕地が拡張された。込高とは縮高となった給人への足し地として給与された地所。新田開発にちなむ地名は他に真新田、巳新田、子ノ年がある。
- 一番割・二番割・三番割(いちばんわり・にばんわり・さんばんわり)・・・込高新田の造成の際に名づけられた番割にちなむ。
- 杵前(いりまえ)・・・込高新田の字名で杵は樋の口ともいい、かつて水門があったことにちなむ。

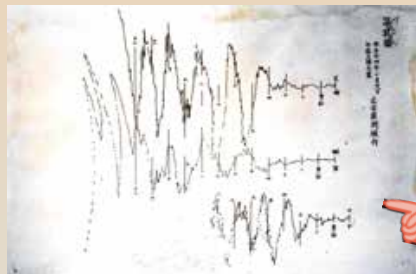
1891 濃尾地震 ～近代の幕開けの巨大地震～

1891(明治24)年10月28日、岐阜県美濃地方西部を震源として発生した濃尾地震(マグニチュード8.0)は、日本の内陸で発生する地震としては最大級のものでした。震源断層付近では震度7相当となったほか、福井県・滋賀県・愛知県・三重県でも震度6、遠く離れた東京や岡山でも震度3が記録され、広い範囲で強い揺れを感じました。震源断層から至近距離に揺れやすい地盤をもった濃尾平野が広がっていたことにより、被害は岐阜県・愛知県を中心に死者7,469人、負傷者19,694人、住家全壊85,848棟、その他の建物を併せて142,177棟と未曾有の被害をもたらしました。

1891(明治24年)10月28日 午前6時38分発災 (直下型地震)



気象台が作成した震災の被害地域



名古屋測候所による地震計の波形

名古屋地域では、れんが造りの名古屋郵便電話局が全壊し、同様にれんが造りの尾張紡績工場も崩れ、38人が死亡し114人が負傷しました。

噴砂を伴う液状化や堤防の破損、ため池の破壊、亀裂、地割れなどが名古屋地域の各所で生じ、鳴海町では井水が1～2m以上も増水し、あふれ出しました。また、瑞泉寺庫裡書院が破壊、鳴海尋常小学校も校舎が壊れ、元役場と如意寺で分散授業を行いました。

余震は震災後2年間に岐阜では3,365回、名古屋では1,278回を観測し、岐阜では10年間も続きました。

鳴海瑞泉寺と災害

瑞泉寺は応永3年(1396)に大徹宗令禪師が開創した名刹であり、文明元年(1469)に兵火により焼失し文亀元年(1501)に現在の地に移転し、後に寺号を瑞泉寺と改めました。その後も火災や風水害、地震の被害を受け、濃尾地震では庫裡・書院などが傾きましたが、「檀信徒有志と相謀り、金三百円で同二十五年三月から七月迄、万事を放擲して復興せしめた」と「鳴海瑞泉寺史」にあります。



<地震計の波形から分かること>

発震時:06時38分50秒、地震計の上下動は10秒まで、水平動は15秒まで記録したのみ

振動周期:1.3秒

最大振幅:223mm【大森房吉博士推定】

南海トラフを震源とした海溝型地震

慶長地震(慶長9年)1605年2月3日

津波の被害が特に大きな地震であった。震央は北緯33°、東経134.9°付近でM7.9とされる。津波は千葉県の犬吠埼から九州太平洋岸に達し、渥美郡では「津波連し、船を打ち破り潮を流す」との記録がある。この地震は二元地震とされ、もう一つは伊豆半島南東沖に震央が推定されている。

宝永地震(宝永4年)1707年10月28日

この地震はわが国最大規模の地震とされ、震央は北緯33.2°、東経135.9°、M8.6と推定される。地震・津波による死者約4,900人、潰家約29,000棟、被害の著しい地域は東海道・伊勢湾、紀伊半島で袋井は全滅、浜松、見付、舞阪、鳴海、熱田で半壊、尾張では壊家のほか、地割より泥水の噴出があった。名古屋市の震度は5～6とされ、名古屋城では土堀やぐらはほとんど損壊した。鳴海宿でも建物が半壊し海岸は液状化し多くの家屋が壊れたことが「宝永地震記」他に記載がある。

安政東海・安政南海地震(安政元年)1854年12月23日、24日

安政東海地震と安政南海地震はわずか1日をおいて連鎖的に発生した巨大地震である。安政東海地震は北緯34.1°、東経137.8°付近に震央を持ちM8.4と推定されている。中部～近畿の太平洋側を中心に震度6以上の強い揺れが襲い、名古屋市の震度は5～6と推定される。一方、安政南海地震は北緯33.2°、東経135.6°付近で発生しM8.4とされる。名古屋市内における震度は5と推定され、被害は中部～九州に及んだ。両地震によって名古屋城三の丸の門、多門櫓、高堀なども破損し、鳴海でも家屋の倒壊がみられ、余震が12月まで続いたとされている。

昭和東南海地震(昭和19年)1944年12月7日

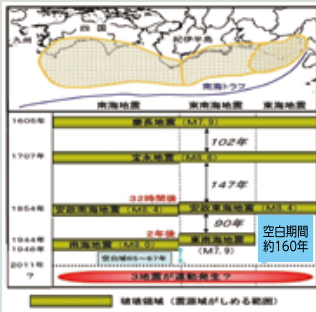
この地震は北緯33.7°、東経136.2°付近に震央を持ち、M8.0とされる。静岡、愛知、岐阜、三重の太平洋沿岸を中心に震度6以上の地域が広がり、中部地方はおおむね震度4以上であった。名古屋市の震度は5～6と推定される。被害は静岡に次いで愛知が多く、名古屋市では港区・南区で住家の倒壊、半倒壊が多く、両付近では住家等の被害率が5割を超えた。名古屋市全体では倒壊1,221棟、半壊6,339棟に達し、死者は121人、負傷者数は485人であった。鳴海・有松でも被害が生じ、大高では春江院の山門が倒れた。

昭和南海地震(昭和21年)1946年12月21日

震央は北緯33°、東経135.6°付近であり、地震の規模はM8.1とされる。被害は四国、九州、近畿、中国を中心として中部地方の一部にまで及び広範囲なものであった。名古屋市の震度は5～6。大変は各地に見られ余震も広範囲に及んだ。名古屋では南部と西部にわずかに家屋被害があっただけで人の被害は少なかったが、振動時間が相当長く市内ではガラスの破損や壁のひび割れ等の生じたところかなりあった。

歴史は繰り返す?

南海トラフ沖で発生した地震を取り上げると下記のような図になります。東海地域を震源とする地震はおおむね100年から150年間隔で発生しており1854年の安政東海地震から現在まで約160年起きておらず、いつ起きてもおかしくない状況にあるとされています。



三河地震(昭和20年)1945年1月13日

三河地震は北緯34.7°、東経137°付近の三河湾内に震央を持ち、地震の規模はM6.8と推定される。地震断層直上の三河村や横須賀村で震度7とされるが、三河地域のほとんどが震度5～6程度であった。名古屋市の震度はおおむね震度4～5と推定され、震源に近い三河地方での大きな被害に比べ、震央から離れた名古屋市の被害は、死者8人、負傷者26人、住家全・半壊532棟と相対的に少なく、狭い範囲に大きな被害を及ぼす内陸直下型地震の特徴を現している。地震発生は冬の深夜午前3時38分、ほとんどの人が寝ている時間であり、「揺れ始めてからほとんど間髪をおかず強い揺れが来る」というものだった。逃げる余裕がなく、死者の多くが倒壊した家屋に押しつぶされて亡くなっているこの地震は、私たちに多くの教訓を伝えている。

～災害記録から学ぶ～

緑区災害

しかし、困ったことには「自然」は過去の習慣にいのである。～寺田寅彦著「地震雑感」/津波と人間より～

<はじめに>

緑区は、名古屋市東南部の丘陵地に位置し、東、平地とゆるやかな丘陵地で形成されています。い市街地づくりが進んでいます。本書は、緑区の過去の災害についてまとめたものです。緑区の地域に備えに役立てていただければ幸いです。

<緑区に被害を及

西 暦	年 号	
1382	永徳2年2月	大火で氷上社や
1656	明暦2年	鳴海の大火で宿
1767	明和4年7月	天白川の氾濫で
1784	天明4年3月	有松村で大火災
1811	文化8年2月	鳴海宿の扇屋か
		117軒が焼失
1853	嘉永6年	伊勢・四日市に大
1854	安政元年11月	安政東海地震・安
		鳴海辺りでも天白
		当時、東海道五十
		震により破損した
1889	明治22年9月	台風による大風で
1891	明治24年10月	根尾谷断層震源
		で井戸水が1～2
1912	大正元年9月	大正元年の台風に
		浸水など大きな被
1944	昭和19年12月	東南海地震で鳴
1945	昭和20年1月	三河地震で鳴海・
1959	昭和34年9月	伊勢湾台風により
		鳴海八幡社本殿
1971	昭和46年8月	台風23号により
1982	昭和57年8月	台風10号の大雨
		崩れが発生
1987	昭和62年9月	大雨により床上浸
1990	平成2年9月	集中豪雨により前
1991	平成3年9月	台風18号の大雨
		水が多数発生、災
2000	平成12年9月	東海豪雨により鳴
		れ災害救助法が

●赤字は本資料で取り上げている地震災害、青字は風

緑区では、各種防災訓練のほか、東日本大震災発生年の平成23年度より「宿泊型避難所開設訓練」、平成25年度からは体験型防災イベント「緑区防災フェスタ」を開催するなど、地域防災力の向上を図っています。平成28年度からは、家具転倒防止ボランティア派遣事業を実施し家具の転倒による被害を防ぐため、家具の固定を進めています。津波対策については、海抜の低い地域を中心に津波避難ビルの設置を推進するとともに、緑区独自の取り組みとして海抜が低い地域を中心に電柱・電信柱・公園灯への海抜表示を始め、区内官署等への海抜表示を行っています。



の歴史

忠実である。(中略) 自然ほど伝統に忠実なものはない

西に扇川、西部区界に天白川、南部に大高川が流れた、広い範囲で土地区画整理事業が行われ、新しりたちや歴史を辿りながら、緑区が被害を受けた過特性と災害リスクを知ると共に、防災・減災に向け

ばした主な災害>

緑区で発災した災害など

民家に被害が出て火高を大高と改称
場全焼し瑞泉寺殿堂も類焼焼失
大高と鳴海に洪水が発生し込高で死者が5人発生
が起こり全村焼失
ら出火「鳴海宿大火」で本陣・脇本陣ほか問屋場など

地震があり瑞泉寺堂宇大破し修理
政南海地震
川の堤が破損し被害あり
三次40番目の宿場であった鳴海宿内の旅籠屋も地

大高西の田面と塩田・込高新田面潮入で死者が7名発生
濃尾地震で鳴海・大高・有松に全壊の家屋の他、鳴海
m以上増水しあふれ、瑞泉寺庫裡・書院など傾く
よる暴風雨で扇川が決壊し鳴海町に家屋流失や床上
害、大高では長寿寺山門と氷上姉子神社庁屋倒壊
海・有松に被害、大高の春江院山門が倒れる
大高・有松に被害

大高、鳴海・有松で甚大な被害、
倒壊、有松小学校北校舎倒壊
緑区に災害救助法適用
で鳴海町字前之輪の急傾斜地崩壊危険区域でがけ

水25戸、床下浸水251戸の被害
之輪でがけ崩れが発生
で扇川と大高川の流域を中心に溢水し、床上・床下浸
害救助法が適用される
海・浦里・緑の3学区約9,000世帯に避難勧告が出さ
適用される

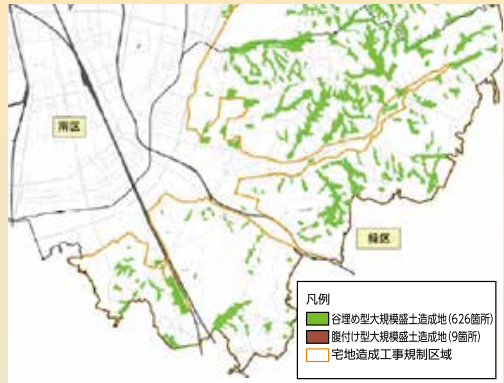
水害

天白川水系では昭和34年の伊勢湾台風を始めとする豪雨や洪水により莫大な被害に見舞われたことを契機として整備が行われてきました。本水系の河川整備計画では、策定後の概ね30年間にわたる治水の目標として、天白川の下流部、天白区野並地点において、東海豪雨相当の洪水(毎秒920立方メートル)が安全に流れる状態に整備するのを始め、天白川の上流部、扇川、手越川、榎田川においても、概ね10年に1回の確率で発生すると予想される規模の降雨(24時間で205ミリメートル、1時間で63ミリメートル)により発生する洪水が安全に流れる状態に整備することとしています。区の中央を流れる扇川には鳴海町町内に水位通報サイレンがあり、関係部署で水位の監視を行うとともに一定水位に達した場合はサイレンが吹鳴し注意喚起を行っています。



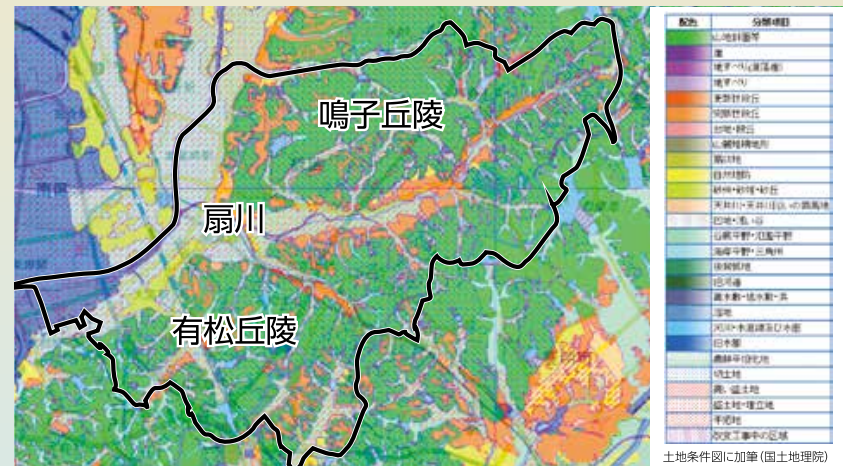
土地利用から見る災害のリスク

緑区の地形は、北部に広がる鳴子丘陵、南部に広がる有松丘陵とそれを刻む河川沿いに発達した谷底平野によって特徴づけられます。地形が大きく変化しているのは鳴子丘陵で、区における区画整理事業は昭和35年に日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)施行の鳴子土地区画整理事業着手と鳴海中部土地区画整理組合の設立から始まりました。その後、区の中央部そして桃山、黒石、神の倉、徳重南部などの北部方面を中心に組合設立が相次ぎ、50年代には滝ノ水などの宅地化が進行しました。このように、宅地需要の増大に応じて区画整理事業が進行した結果、本来の丘陵の景観を残す地域はわずかに残っています。これを示すのが「大規模造成地マップ(右図)」で、北部に土地改変の多いことがわかります。この地域では、丘陵を削って造成された土地や谷を埋めた土地など、大規模な土地改変が行われ、地形が大きく変化しています。



<大規模盛土造成地マップ>

地形分類について示されている土地条件図(下図)を見てみると、丘陵(山地斜面等・段丘)の大部分が切土地となっている一方、谷底平野は盛土地又は高い盛土地となっていることがわかります。

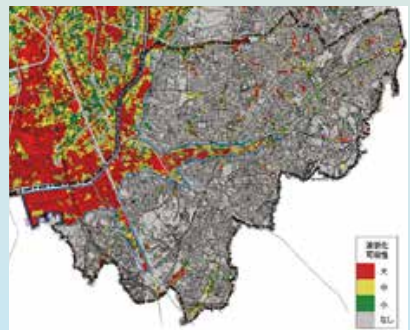


土地条件図に加算(国土地理院)

発生が危惧されている南海トラフ巨大地震の本市の被害想定(右図)によれば、緑区での液状化の可能性は一部の地域(右図青田部分)に集中しています。これは、標高が低く、河川の堆積作用で形成された谷底平野であるため、地盤が軟弱であることが原因と考えられます。

一方、液状化の可能性なしと想定されている地域の中に、液状化の可能性のある地域が散見されます。一見、標高が高く、地盤が強いように思われますが、この地域は、過去に谷底平野であった部分に土を盛って造成した平坦地であるため、地盤が軟弱であることが原因と考えられます。また、このような地域における地震の被害として、滑動崩落が挙げられます。滑動崩落とは、地震時に盛土全体または大部分が主として盛土底面を滑り面として旧地形に沿って流動、変動または斜面方向へ移動することです。平成7年の阪神・淡路大震災や平成16年の新潟県中越地震などでは、大規模に谷を埋めた造成宅地で滑動崩落による被害が多発しました。

名古屋市内には、東部丘陵地を中心に635箇所の大規模盛土造成地があり、現在の地形を見ただけでは、どのような場所であったのか分からないところも多く存在します。大規模造成地=危険というものではありませんが、このような場所が身近に存在し、地震による造成宅地の滑動崩落により多くの宅地災害をもたらす可能性があることを知っておくことも必要です。このように土地の成り立ちを知ると、災害発生時の被害の傾向をあらかじめ知るにつながります。また、過去の被害の様子と重ね合わせ、現在の都市状況と比較して考えることで、自分の住むところのどの程度の被害となるかもイメージしやすくなります。やみくもに災害時の被害を恐れていても、日頃の備えにつながりません。まず、自分の住んでいる土地の成り立ちを知り、地震などの自然現象が住まう地域に対してどのような被害を引き起こすのか、そのリスクをできるだけ正確に把握すること。状況に併せて必要なだけの対策を講じることが、自助力向上の一端となるのではないのでしょうか。



<あなたの街の地震ハザードマップ緑区に加算>

- 過去の災害の資料や地形を調べる際には、図書館や名古屋都市センターまちづくりライブラリー、名古屋市港防災センター、愛知県公文書館の資料や国土地理院HPのマップ検索などが役立つので活用しましょう。
- 本資料を作成する上での主な参考資料
愛知県・名古屋市長(2009)『二級河川天白川水系河川整備計画』、浅井大仙・川口高風(1977)『鳴海瑞泉寺史』愛知県郷土資料刊行会、淡河俊之編(2014)『緑区誌 区制50周年記念 緑区制50周年記念事業実行委員会、榎角川書店編(1992)『なごやの町名』名古屋計画局、榎原邦彦(1984)『緑区の歴史』愛知県郷土資料刊行会、社団法人中部建設協会編(2010)『忘れない、東海豪雨』、新修名古屋市史資料編集委員会編(2008)『新修名古屋市史 自然編 自然』名古屋市長、政府広報・内閣府『みんなの力を、防災の力に(地名があらわす災害の歴史)』(http://www.gov-online.go.jp)、中央防災会議編(2011)『災害史に学ぶ〜内陸直下型地震編〜』内閣府、中央防災会議編(2011)『災害史に学ぶ〜風水害・火災編〜』内閣府、寺田寅彦(2011)『地震雑感/津波と人間』中央公論新社、独立行政法人防災科学技術研究所編(2002)『主要災害調査第38号』、名古屋消防局編(2001)『東海豪雨災害に関する記録』名古屋市長、名古屋消防局(2015)『東海豪雨4月号』名古屋消防局望楼会、名古屋地方気象台監修(1971)『愛知県災害誌』愛知県、名古屋市民防衛会議地震対策専門委員会編(1978)『濃尾地震文獻目録』名古屋市長、名古屋市民防衛危機管理局編(2014・2016改定)『名古屋市民防衛対策実施計画』、名古屋市長、名古屋市長(1979)『南区誌(区制施行七十周年記念)』、緑区誌緑区制20周年記念区誌編集委員会編(1983)『緑区誌』名古屋市長、名古屋市長